

## 艱難前携挙説に伴う「空中再臨」の謎

プロテスタント系福音派に「空中再臨」「地上再臨」という解説が見られます。

「艱難前携挙説」によれば、キリストは最初に地に来られ、その後、大艱難前に空中再臨があり、艱難後（7年後辺りに地上再臨があると言われていています。

「艱難中携挙説」や「段階携挙説」というのもあるようです。

いずれにしても、先ず「空中再臨」その後「地上再臨」ということになっています。

ということは、初臨を含め、キリスは合計3回来られるということです。

聖書のどこにそんなことが書かれているのでしょうか。

聖書にははっきりと「二度」しかないと書かれています。

「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているようにキリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」一ヘブライ9:27,28

なぜパウロは三度めの到来について言及しなかったのでしょうか。

パウロがここで述べているのは、人間は生を受け、しかし受け継いだ罪のための必ず一度、死を経験します。（老衰、事故死、病死など）そして復活後の裁きの際に死に定められる人の第二の死、もしくは永遠の命が保証される命を得るかどちらかで、何れにせよ、命に関して三度目はないのと同じで、キリストの到来も二度であり三度目はありません。

試しに「空中再臨」というキーワードで検索をかけてみました。

上位に掲載されている、たまたま開いたサイトに記されていた説明を一部引用させていただくと、次のようなものがありました。

【私は、これまでずっと日本の教会において、キリストの再臨は『空中再臨』と『地上再臨』の二段階である、という説を聞いてきました。

すなわち、患難時代の始まるときにキリストの空中再臨があり、それと同時にキリスト者の復活や、携挙（キリスト者が空中に携えあげられること）がある。それから七年の患難時代が始まって、その患難時代の終わりにキリストの地上再臨がある、という説です。】

一 Remnant 終末論 <http://www2.biglobe.ne.jp/remnant/shumatsu04.htm>

【「携挙」ということば自体は聖書にはありませんが、教会が天に一挙に引き上げられ（携え挙げられ）て、空中で主と会うということを意味する用語です。・・・「第一の復活」には A と B があり、A は教会の携挙の時に主にあつて死んだ者がよみがえり、朽ちない新しいからだを与えられます。B は、患難期においてイエスをメシアと信じて殉教した者たちがキリストの地上再臨の時によみがえる復活です。】

一牧師の書斎 キリストの空中再臨と教会の携挙

<http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%82%AD%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88%E3%81%AE%E7%A9%BA%E4%B8%AD%E5%86%8D%E8%87%A8%E3%81%A8%E6%95%99%E4%BC%9A%E3%81%AE%E6%90%BA%E6%8C%99%20%28%E3%81%9D%E3%81%AE%E4%BA%8C%29>

このサイトでは、再臨が2度だけでなく、復活も艱難前と後の2度あるということで、これには正直驚きました。

しかも「第一の復活 A」「第一の復活 B」という表現には2度びっくり。

ほんとうに「第一」が2つあっていいのでしょうか。

ということで、これを含めて検証してみることにしました。

(いわゆる「携挙」については後日、レポートを掲載する予定です)

まず黙示 20：6 の「第一の復活」の「第一」と訳されるギリシャ語「フロトス」について調べてみます。

幾つかの聖句のこの語が様々な翻訳でどのような単語に訳されているかを見てください。

岩波翻訳委員会訳 [ 岩 ] )

新共同訳 [ 共 ]

前田訳 [ 前 ]

新改訳 [ 改 ]

塚本訳 [ 塚 ]

口語訳 [ 口 ]

一例として、マタイ 19：30 に見られる「フロトス」はこうなっています。

「最初の（フロトス）者の多くが最後の者となり、最後の者が最初の者（フロトス）となる」

「最初の者」 [ 岩, 前 ]

「先の者」 [ 共, 改, 口, 文 ]

「一番の者」 [ 前 ]

などで、「フロトス」の殆どはこれと同様に訳されています。

他には、マルコ 6:21, ルカ 19:47、使徒 13:50; 16:12 などに出てくる「フロトス」は「指導者たち、筆頭の者、名士、有力者、おもだった者たち」などと訳されています。

また、使徒 17:4 の「フロトス」は身分の高い(女たち)[岩]、「おもだった婦人たち」[共]、「一流の婦人」[前]、「貴婦人たち」[改, 口]、「有力な婦人たち」[塚] などと訳されています。

さらに、1 コリント 15:3 の「フロトス」は「まず第一に」[岩]、「最も大切なこと」[共]、「第一義的に」[前]、「最も大切なこと」[改]、「一番大切な事」[塚]、「最も大事なこと」[口]。

1 テモテ 1:15 の「フロトス」は、「筆頭者」[岩]、「最たる者」[共]、「わたしこそ第一」[前, 塚]、「かしら」[改, 口]、「首なり」[文]。

そして、ルカ 15:22 には「急いで極上の(フロトス)衣服を出して来て、息子に着せなさい。」という表現が見られます。

いずれの場合も「最上級」の語として表されています。

また、契約や神殿に関するヘブライ人への手紙(9:1,2,6,8,15,18; 10:9)で使われている(フロトス)もすべて唯一であり文字通り最も初めのもの[だけ]を指しており、2次的、付随的なものの入り込む余地を許してはいません。

最後に興味深い例として、マタイ 27:5 の「フロトス」を挙げておきましょう

「七人の兄弟がいました。長男(フロトス)は妻を迎えましたが死に、跡継ぎがなかったので、その妻を弟に残しました。

次男も三男も、ついに七人とも同じようになりました」—マタイ 22:25,26

ほとんどの翻訳も「フロトス」(字義訳「その最初のもの」)を「長男」と訳しています。

兄弟の最初の者だから「長男」と訳しているわけですが、先に引用したサイトにあるような「第一の復活 A、第一の復活 B」という感性を持つ方は、おそらく次男を「長男 B」と呼び、末っ子を「長男 G」と呼ぶことに何の違和感も感じないのでしょうか。

しかも、「第一の復活」について聖書が明らかにしているのは、黙示 20：5,6 の2箇所だけであり、この記述は、艱難も終了し、サタンが捕らえられた後、千年王国の開始時点での出来事としての記述です。

このタイミングでの復活に与る人以外の「ほかの死者」は千年が終わるまで生き返らなかった。とはっきり記されています。

もし、このときの死者が、艱難期の殉教者だけを指すと言うのなら、歴史上のそれ以前のクリスチャンも「他の死者」の中に入ってしまうことになります。しかしそれでは他の聖句との整合性が取れませんので、当然この「第一の復活」に与るのは全クリスチャンの死者を対象にしたものと言えます。

艱難前に「携挙」があるということにするためには、それに続く「復活」もその時引き続き起きなければならないために、苦肉の策としてどうしても、復活二段回施行という不思議な教義を創設せざるを得ないのでしょう。

ましてや、新設した方の「艱難前第一復活」を「A」本命とし、本来聖句が述べている、患難後の「第一の復活」の方をB級の復活と呼ぶ神経はいかがなものでしょうか。